

マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 #4 原作シナリオ

山崎浩治

マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 #4 原作シナリオ

#1 片町の裏路地にある「居酒屋まわりみち」・店内

作務衣姿のアヤカがカウンターを拭いている。

アヤカのM「今日は週2回入る居酒屋まわりみちでバイトの日。その夜、お父さんが初めて店にやってきました」

タクシードライバーの制服で入ってくる美咲一夫(50代)。

一夫「(マスターの末吉に一礼し)娘がいつもお世話になっとります」

末吉「こちらこそ、アヤカちゃんには助けてもらってますよ」

一夫「(アヤカに)様子見に来たんや。ノンアルコールビールと煮込み、もらおうかな」

アヤカのM「お父さんはもともと仕事命の会社人間で、全国を飛び回る営業マンでした。けど3年前にリストラされて、いまは故郷の七尾でタクシードライバーをやってます」

#2 タクシーを運転している一夫(和倉温泉あたり)

アヤカのM「北陸新幹線効果で少し景気はいいらしいけど、お父さんにあんまり迷惑かけられないから、あたしは大学の学費と一人暮らしの生活費を稼ぐためバイトの日々。もっともスナック香澄のバイトは秘密にしてるけど……えへへ」

#3 「居酒屋まわりみち」店内

おいしそうに煮込みを食べている一夫に、

アヤカ「どうして金沢に出てきたの？」

一夫「明日、父さんたちの結婚記念日なんや。それで母さんにプレゼント買おうと思ってな(制服のポケットから指輪ケースを取り出す)」

#4 暖簾をしまった閉店後の店内

後片付けしているアヤカと末吉。

末吉「結婚記念日にプレゼントだなんて、アヤカちゃんのお父さんは愛妻家だな」

アヤカ「だけどお母さん、1年前に病気で亡くなっているんですよ」

末吉「(絶句して)え」

アヤカ「結婚記念日なんて一度もお祝いしたことがない人なのに……お父さんは仕事ばかりで家のことは全然顧みず、その上、会社はリストラされちゃうし。お母さん、苦勞しっぱなしで、死んじゃったんですよ」

#5 一夫の家・仏間(夜)

アヤカのM「お母さんが死んでから、あたしとお父さんの関係はギクシャクしてた」

仏壇に指輪ケースを供え、手を合わせている一夫。

穏やかに微笑む遺影の妻・博子(50代)。

アヤカのM「……お母さんの人生、幸せだったの？」

何かを祈り続けている一夫。

#6 「居酒屋まわりみち」店内(別の日の夜)

暖簾をくぐってくる一夫。

アヤカのM「それから時々、お父さんが店にやってくるようになりました」

一夫、煮込みを食べながら、カウンター内のアヤカに、

一夫「母さんの大好物、何だったか知っとるか」

アヤカ「20年以上夫婦やってきて、お母さんの好物も知らなかったの？」

一夫「……」

アヤカ「カレーライス。お母さん、小食だったけど、カレーの日だけはいつもお替わりしてたじゃない？」

一夫「(目を細めて嬉しそうに)……カレーか」

アヤカ「どうしたの？ こないだから変だよ、お父さん」

#7 一夫の家・台所

エプロンをした一夫がカレーを作っている。

一夫「(味見して)……まずっ」

#8 一夫の家・仏間

仏壇にカレーライスを供え、手を合わせている一夫。

一夫のM「病気で死期を悟った女房は、わしが一人残されても寂しくないように、家じゅう至るところに置き手紙を隠して逝った」

筆筒や食器棚の引き出しから出てくるメモのような置き手紙。そこに「お父さん、結婚記念日、覚えとる？」「私の大好物は？」などと書かれている。

一夫のM「一番新しく見つけた置き手紙は、こんな内容やった……」

「私の一番好きな場所はどこ？」と記された一枚のメモ。

#8 「居酒屋まわりみち」店内(別の日の夜)

カウンター席に座っている一夫。

アヤカ「お母さんの一番好きな場所かあ……どこだろう(と首をひねる)」

別のカウンター席にいた若いイケメン男が口を挟んできた。

男「アヤカちゃん、オレが調べてあげようか」

アヤカのM「この人は常連のトオルさん。なんでもオネエ探偵の下で働いているらしい」

アヤカ「(焦って)いやいや、探偵さんに頼むほどのことでは……(一夫に)お母さんとよく行った場所とかないの？」

一夫「(腕組みして)……う～ん」

アヤカ「そういえばお母さん、亡くなる間際、病院で言った」

9 病院の憩いコーナー

車椅子の博子と見舞いに来たアヤカがいる。

博子「(遠い目で外を見て)もう一度、兼六園の松、見たかったなあ……」

10 もとの「居酒屋まわりみち」

一夫「(閃いて立ち上がって)……そうか！」

11 兼六園・その中(翌日の昼)

肩を落としている一夫の背中。

一夫のM「あの時、わしらが見た夫婦松はずいぶん前に枯れて死んでしまっったよ」

12 兼六園(回想)

一夫のM「結婚前、二人で兼六園を歩いた時、おまえは言ったな」

若き日の一夫と博子が仲よさそうに歩いてくる。

アカマツとクロマツが仲良く寄り添って立つ往時の夫婦松。

博子「この松のように、私たちもずっと一緒にいられたらいいね」

13 兼六園(現在)

拳を握りしめ、嗚咽をこらえている一夫。

一夫のM「わしは自分のことばかりで、おまえの病気に気付いてやれなかった。もう一度夫婦松を見せてやれんで、ほんとうにすまん」

14 居酒屋まわりみち(夜)

目を真っ赤にしているカウンター席の一夫の前に、アヤカがカレーライスを置いた。

アヤカ「あたしが作ったまかない用のカレー……マスターがお父さんに出せ、って」

末吉「(ニッコリ笑って)サービスです。どうぞ」

一夫「どうも……(一口食べて、ハッとして)これは」

アヤカ「(心配そうに一夫をのぞき込んで)お母さんのレシピで作ったんだけど……」

一夫のM「……女房の味やった」

アヤカの顔が博子の顔にオーバーラップしていく。

一夫のM「おまえは置き手紙を残すことで、わしとアヤカの架け橋になってくれたんか。そして置き手紙だけでなく、わしにアヤカも残していつてくれんたんやな」

一夫「(泣き笑いで食べて)母さんのカレーがまた食べられるとは思わんかったぞ！」

アヤカ、一夫を優しく見つめている。

アヤカのM「お母さんのこと、ほんとに愛してたんだね、お父さん」

一夫の隣に、ニコニコ微笑む博子が並んで座っている(幻想)。

15 一夫の家・寝室

鏡台の鏡の裏に、ピンで止められた置き手紙。

「幸せな人生やったよ。あんやとね、あなた」と記されている。